大北東城跡現地説明会資料

令和５(2023) 年 11 月　三重県埋蔵文化財センター

１　発掘調査の経緯

大北東城跡は、伊賀市蓮池に所在します。県道路建設工事に伴いその対象地での発掘調査を、令和５年５月から行ってきました。現地での調査は 12 月に終了予定です。まだ、発掘調査は継続していますが、現時点の発掘調査の成果を公開します。

２　大北東城跡の現状

以前から、三方を土塁に囲まれた城跡として知られていました。土塁の他にも、空堀、見張り台、土塁下の平地の存在が指摘されていました（伊賀中世城館調査会 1997『伊賀の中世城館』)。地元住民からの情報によれば、最近まで住宅や畑地として使われていたとのことです。

写真１　大北東城跡発掘調査遠景（東から）

カクランされていました。そのため、遺構（昔の生活の跡）の確認は難しい状況でした。

城跡との関連がうかがえる遺構は、第１図の掘立柱建物 19（地面を掘った穴に柱を直接入れた建物))、柵 17・22・23、溝８・17、土塁３、犬走りがあたります。

掘立柱建物19は､柱穴の間隔が1.8～2.0mのものです｡東西２間(4.0m)､南北４間(7.8m)の大きさがありました。

柵 20 は、溝 17 を掘削後に確認することができました。柱穴の間隔が 1.0m のもので、南北８間分を確認しました。もともとは確認した部分よりも長くなります。

柵 22・23 は、建物になる可能性がありますが、現時点では柵としておきます。この２つの柵は、溝 17・柵 20 とほぼ同一の方向となっているようです。

溝８は、幅 0.4m、深さ 0.3m 程度の大きさで、現代の溝９に切られていました。溝９の部分からは延びないようです。溝 17 は幅 0.8m、深さ 0.3m 程度の大きさで、南へ延びるようです。溝８と 17 は位置的には平行となっており、食い違いとなっています。また、掘立柱建物 19・柵 20 もほぼ同一の方向となっています。なお、溝 17 から東には遺構をほとんど確認できませんでした。

土塁３は、平地から８m 程度の高低差があります。自然地形を活用し土塁としたのではないでしょうか。また、犬走りは幅 1.2m 程度の通路状になっています。

これらの遺構からは、土師器小片、瓦器椀、陶器小片が出土しており、鎌倉時代から室町時代というように幅があり、時期が決めづらい状況となっています。城跡であることを踏まえ、室町時代後半（約 500 年前）と考えています。また、犬走りについても同時期と考えています。

城跡との関連がうすい遺構として、溝 15 は、幅 0.7m、深さ 0.4m 程度の大きさで溝 17 より新しい状況でした。この遺構からは、須恵器提瓶、瓦器椀、土師器羽釜が出土しました。時期は、古墳時代（約 1,500 年前）から室町時代（約 500 年前）のものです。

４　まとめ

発掘調査の結果、土塁３下の平地は、城として機能していた時（室町時代）には、食い違いの溝２条や柵で区画し、土塁３直下には掘立柱建物や柵を設置していたことがわかりました。また、溝 17 から東には遺構がほとんどなく広場的な意味合いがあったのではないでしょうか。このように、本城跡の空間の利用がわかってきました。

本城跡から、西へ 100m のところに脇田氏城跡、280m のところに村井氏城跡、東へ 250m のところに安場氏館跡、300m のところに和田城跡、500m のところに百地氏城跡、南へ 160 mのころに上山氏城跡・西岡氏館跡、400m のところに吉田氏城跡が残っています。蓮池地内には、城や館跡が多くあります。その全てが同時代に機能していたのかは、はっきりしてはいません。本城跡は、小さい勢力が割拠していた室町時代当時の伊賀地域の社会情勢の影響を受けていたのではないでしょうか。

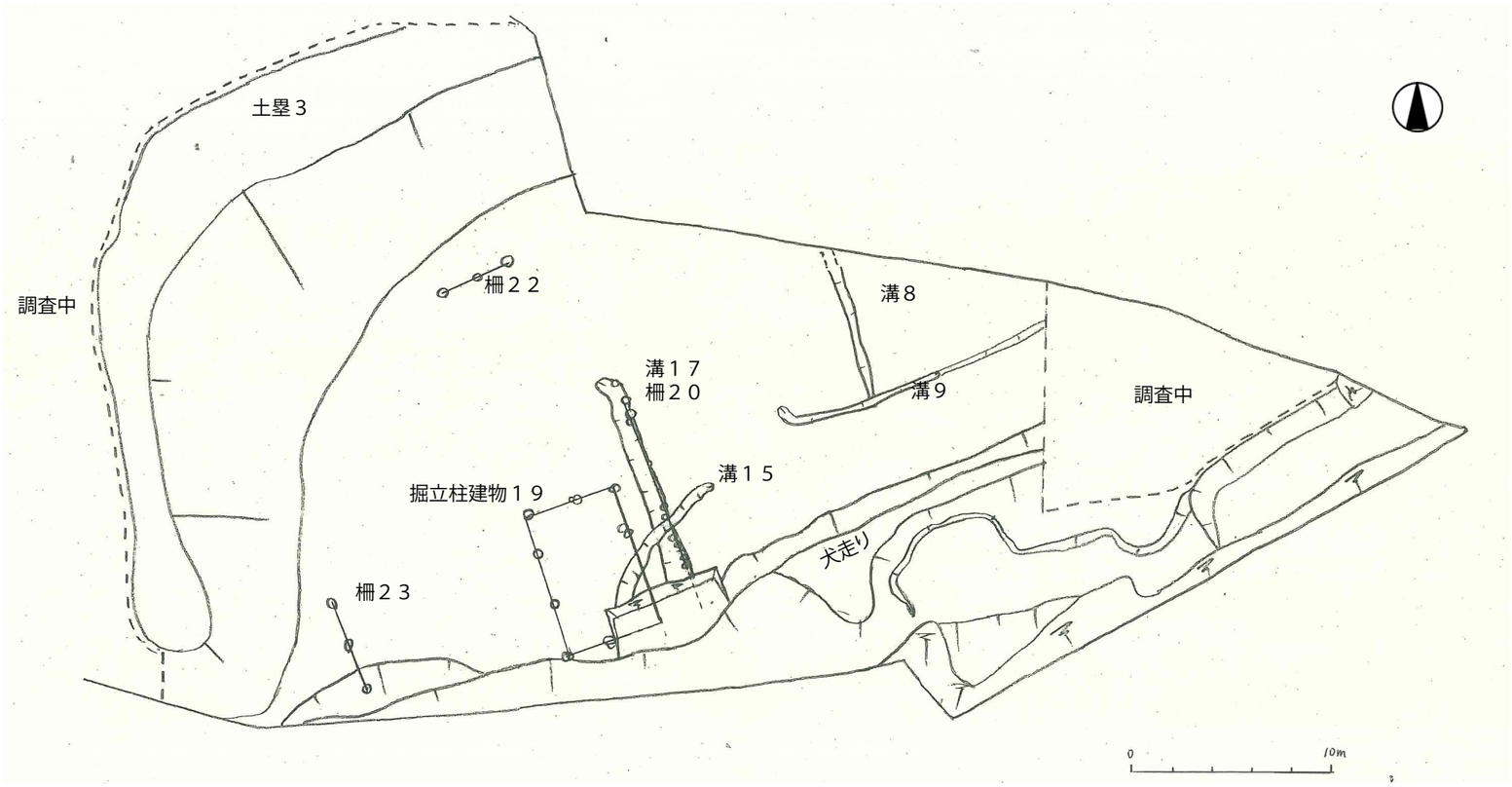
３　発掘調査の成果

今回の調査は、城跡（しろあと）の西側の土塁や土塁下の平地の部分が対象となっています。発掘調査により、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）、柵（さく）、土塁、柱穴（ちゅうけつ）等を確認しました。対象地は、現代の造成や耕作と城跡の造成部分が重なっており、そのうえ木が多く生えていたため、木根により地中が

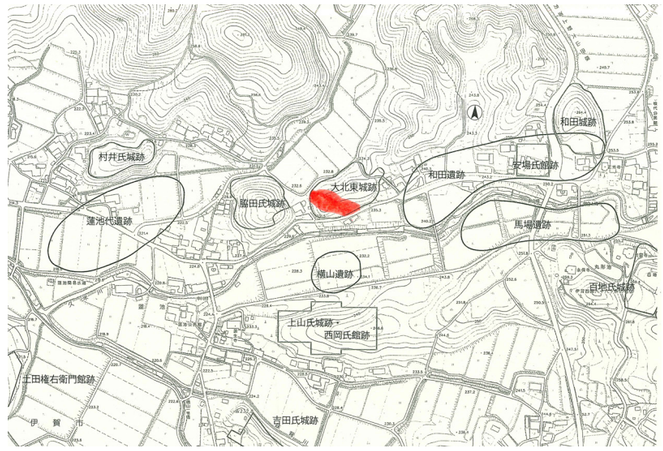
写真２　掘立柱建物 19、柵 20・22・23、溝 17（上から）

写真３　掘立柱建物 19（北から）

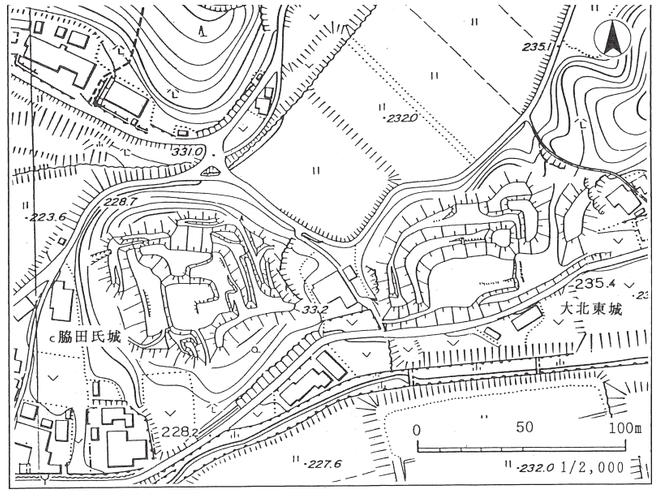
写真４　溝 15 出土遺物



第１図　遺構概略図（1:300）



第２図　調査区位置と周辺遺跡（1:8,000）　※赤塗部分、調査区



第３図　縄張り図（1:3,000）

写真５　調査区遠景（西から）